
中古語の連体修飾構造における 無助詞主語と「の」格主語

非対格性と他動性回避

金 銀 珠

1. はじめに

現代日本語の「髪の高い女」のような連体修飾節の表現は、中古の日本語では次の例文(1)(2)にみるように、「髪の高き女」「女の髪高き」「髪高き女」「女、髪高き」のような連体修飾構造で表現され得る。それぞれに相当する中古語の実例の用例を各例文の右側に併記しておく。例文(1)は「の」が介在した連体修飾構造で、(1a)が現代語と同様に主語を表示する「の」が介在した連体節、(1b)が「女の髪高き(人)」のような意味で、主名詞が現れず用言の連体形が名詞の意味を兼ねて表現する準体節の用例である。以下(1a)を「「の」連体節」、(1b)を「「の」準体節」と呼ぶことにする。例文(2)は(1)と対応しているが、主語を表す助詞が表示されない無助詞主語の連体修飾構造である。以下(2a)を「無助詞連体節」、(2b)を「無助詞準体節」と呼ぶことにする。

- (1) a. 髪の高き女 月のをかしき夜、忍びたる所に、(源氏物語・若紫)
b. 女の髪高き 母なき男子の、かたち心すぐれたるを持ちて、(うつほ物語・吹上)
- (2) a. 髪 ϕ 高き女 頭白き姫一人水汲む。(うつほ物語・藤原の君)
b. 女 ϕ 髪高き 仕うまつる人の娘、年若く、かたち清げなるを召して、
(うつほ物語・藤原の君)

本稿では、(1)のような「の」格主語が用いられる連体修飾構造と(2)のような無助詞主語が用いられる連体修飾構造の用例を修飾部内の述語の性質に注目して分析し、現代語では「髪の高い女」と表現される一つの事態内容が、中古語で(1)と(2)のような連体修飾構造で表現される理由は何であるのかについて考えようとする¹⁾。特に以下の2点に注目する。

- ①「の」の介在がある場合と助詞の介在がない場合の違いは何か。
 ②「の」の介在がある場合と助詞の介在がない場合の連体修飾構造の選択に関わる要因は何か。

なお、(1a) (1b) のような「の」が介在する連体節、準体節における述語の性質については金 (2007) において論じている。本稿は金 (2007) の議論を拡大し、上記の問題について考えることにする。

2. 問題の所在

主格を表す助詞「の」に関する従来の研究は、助詞「が」との比較の中で展開されてきた。助詞「が」が日本語の主語表示の助詞として勢力を拡大してきた歴史的な事実を考えれば、このような研究上の方法は必然であったと言える。しかし「が」との比較それ自体は問題ではないが、「が」と「の」との比較が既定の方法として固定化することにより、連体修飾構造という観点が置き去りにされてきたことはいなめない。中古語は「が」で主語を表示する例は少数で、先の例 (1) のように「の」を主語を表す有標の助詞として用いるか、(2) のように助詞が存在しない無助詞主語を用いるかが主な方法であった。また「の」で主語を表す場合と無助詞で主語を表す場合、それぞれ (1a) (2a) のような連体の構造をとることもできれば、(1b) (2b) のような準体の構造をとることも可能であった。言語表現の経済性からすれば、中古語におけるこのような連体修飾の現れ方には、何らかの意味的統語的要因が関与していると仮定した方が妥当であろう。しかし従来の研究においては、このような視点に立って連体修飾構造を問題にしている論は高山 (2002) が連体修飾におけるハダカ格 (本稿の無助詞) と「の」格主語の用例を述語の性質の違いに注目して論じている以外皆無に近い。高山 (2002) の調査は、本稿のもくろみと重なるところがあるが、本稿の結果は高山 (2002) のそれと必ずしも一致せず、補充するところもある。詳細は該当するところで述べる。以下、本稿では先の例 (1) と (2) のような連体修飾構造の現れ方に関与する要因を考察する。

3. 述語部の特徴

本節では先の例 (1) のような「の」連体節、「の」準体節、(2) のような無助詞連体節、無助詞準体節を対象に節内の述語部に見られる特徴について分析する。資料は、中古語の文学テキストの源氏物語、うつほ物語、落窪物語、竹取物語による²⁾。歌の中に見られる用例は特殊な比喻表現等も混在しており対象外とし、「夜更くることの心もとなき」(源氏195) のような形容詞サ形と「かぐや姫のいはく」(竹取55) のようなク語法は述語が名詞に相当すると考え、対象外とする。

なお、各節の特徴を検討するにあたって、それぞれの節を主名詞と成す連体修飾構造の違いによって「内の関係」と「外の関係」（寺村1992）に分ける。寺村（1992）によれば、日本語の連体修飾構造は、修飾部と主名詞との間に格関係が成立する「内の関係」と、そのような関係が成立しない「外の関係」に分類される。たとえば、準体節には「形状性名詞句」と「作用性名詞句」（石垣1955）と呼ばれる性質を異にする二種類の名詞句が存在し、両者は連体修飾節内の述語の性質に違いが見られることが知られている³⁾。これは現代語文法の分け方では前者が「内の関係」、後者が「外の関係」に対応し、この分け方は中古語の分析にも有効であろうと思われる。各節の内の関係と外の関係の例文は以下の(3)～(6)のようで、それぞれ a が内の関係、b が外の関係の用例である。

(3) 「の」連体節

- a. 藤壺のまかてたまへる三条宮に、御ありさまもゆかしうて、参りたまへれば、
(源氏1-390)
- b. 少将のなきをりに見すれば、心うしと思へど、(源氏1-265)

(4) 「の」準体節⁴⁾

- a. 黄なる生絹の单袴長く着なしたる童のをかしげなる、出で来てうち招く。
(源氏1-211)
- b. 殿のしかのたまはせむは、いなびきこえさすべきにもあらず。(落窪363)

(5) 無助詞連体節

- a. 親ある人は、それこそともかくも急げ、(落窪86)
- b. 人少ななる折なれば、心やすし (落窪98)

(6) 無助詞準体節

- a. 仕うまつる人の中に、心確かなるを選びて、(竹取70)
- b. 夜さり来たるに、四の君泣きて、さらに出でたまはねば、(落窪222)

以上の内の関係と外の関係の違いによる節の傾向は、論が煩雑になるのを避けるため、特に両者の違いによる差異が見られる際に詳細に示すことにする。

3.1 述語のタイプ

まず、本節では述語のタイプによる違いを見る。述語のタイプは形容詞、非対格自動詞、非能格自動詞、他動詞に分ける。近年、自動詞に非対格自動詞と非能格自動詞の2種が存在することが論じられている。非対格自動詞は「ある」「降る」のように意味的にみて意図的な動作主が存在せず、状態主や自然になんらかの変化を被る対象物を主語に取る自動詞である。非能格自動詞は「踊る」「泳ぐ」のように意図的な動作主による動作・行為を表し、他動詞により近い意味的な性質を持つものである。この2種の自動

詞の違いをもたらす根本的な原因を統語構造の違いに求める論もあるが⁵⁾、本稿は本質的には動詞の意味的性質に根ざしているとする立場にたち (Van Valin 1990、Dowty 1991、影山1996、1999等)、上記のような意味的な側面を重視する。なお、他動詞に関してもその意味的性質により下位分類することがあるが、詳細は該当するところで言及する。

表1は、節別における述語のタイプの分布を示したものである。また表2は、表1の各節をさらに内の関係と外の関係の連体修飾構造に分けて示したものである。表1と表2は先ほど挙げた文学作品を対象としたトータルの数字である。

表1 各節における述語のタイプ

	無助詞節		「の」介在節	
	連体節	準体節	連体節	準体節
形容詞 ⁶⁾	306	61	50	90
	45.1%	39.1%	13.1%	21.6%
非対格自	287	73	130	167
	42.3%	46.7%	34.3%	40.2%
非能格自	31	6	33	45
	4.5%	3.8%	8.7%	10.8%
他動詞	53	16	166	113
	7.8%	10.2%	43.7%	27.2%
合計 (100%)	677	156	379	415

表2 各節の内／外の関係による述語のタイプ

	無助詞節				「の」介在節			
	連体節		準体節		連体節		準体節	
	内	外	内	外	内	外	内	外
形容詞	231	75	12	49	7	43	40	50
	55.5%	28.7%	44.4%	37.9%	4.7%	18.5%	36.0%	16.4%
非対格自	172	115	15	58	28	102	55	112
	41.3%	44.0%	55.5%	44.9%	19.0%	43.9%	49.5%	36.8%
非能格自	4	27	0	6	13	20	2	43
	0.9%	10.3%	0%	4.6%	8.8%	8.6%	1.8%	14.1%
他動詞	9	44	0	16	99	67	14	99
	2.1%	16.8%	0%	12.4%	67.3%	28.8%	12.6%	32.5%
合計 (100%)	416	261	27	129	147	232	111	304

(※内：内の関係、外：外の関係、以下同様)

3.1.1 無助詞節

まず、比較的明瞭な傾向を示している無助詞節の述語のタイプについてみる。次の図1は表1の無助詞節の結果をグラフ化したものである。表1と図1をみると、語のタイプによる分布では連体節、準体節共に類似した傾向を示しており、それぞれ「足白き盗人」(落窪124)、「心確かなるを選びて」(竹取70)のような形容詞が4割前後、「皆人々静まりぬる折に」(落窪191)、「かくて年月経るに」(落窪393)のような非対格自動詞が4.5割前後で、

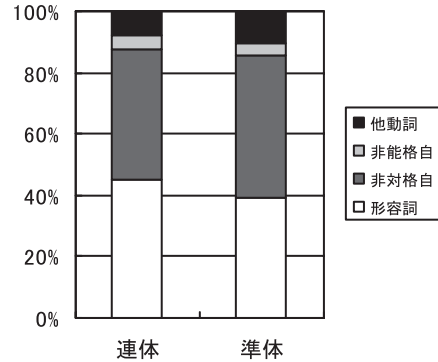


図1 無助詞節の述語のタイプ

、両語群合わせて9割前後の高い分布を示している。他動詞、非能格自動詞が次に続くが、これらは両節共に1割前後の使用率にとどまっている。他動詞と非能格自動詞は、表2をみるとほぼ外の関係に集中しており、内の関係の連体構造では連体節、準体節共に形容詞か非対格自動詞が圧倒的である。さらに、他動詞、非能格自動詞の用例を詳しくみると、一定の偏った傾向性が見られる。まず連体節、準体節合わせて他動詞全69例の構成を見ると、例文(7)のように述語が主語の知覚感覚活動を表すものが29例、(8)のように「言ふ」を中心とした言語活動を表す主体動作動詞(工藤1995)が20例、(9)のように言語活動以外の主体の動作や長期的動作を表す主体動作動詞が9例、(10)のように所有、状態を表すものが6例、(11)のように主体の動作と主体の変化を表す再帰動詞(工藤1995)が1例を占める。

- (7) a. まづ、男君思ふやうにおはすめりと見あへり。(落窪275)
 b. あまねく人知らぬさきに、部屋に籠めてまもらせむ。(落窪160)
 c. 人見ぬ方より引き入れて、下ろしたてまつる。(源氏1-192)
 d. 身の才は、人聞く所にて上手と定めらるるなむよき。(うつほ1-529)
- (8) a. この人言ふやう、「今宵人待つらむ宿なん、あやしく心苦しき」(源氏1-154)
 b. 少納言の乳母とこそ人言ふめるは、この子の後見なるべし。(源氏1-281)
- (9) a. いまだ仲忠かやうに弾くときなし。(うつほ1-117)
 b. 男君離れたまはず、かしづきたまふこと限りなし(落窪232)
- (10) a. 我得たらむ丹波の庄は、年に米一斗だに出で来べきならず、(落窪351)
 b. 人々さうぞきそして待つに、「おはしたり」と言へば、(落窪212)
- (11) a. 君達着たまへるもの、こよなくおとりて見ゆ。(落窪315)
- (12) a. 阿修羅、木をとり出でて割り木づくる響きに、(うつほ1-28)

この中、(7) (8) (10) は動作主による動作を表すというより、主語の心的状態や所有状態、認識活動、表現活動を表すものである。(9) と (11) は動作主による動作が加わっており、動作主性が強いが、(9) は動作主の活動そのもの、(11) は動作主の動作や変化に注目するだけで、動作主の行為によって対象物に変化が加わるといった典型的な他動詞の性質を持つものではない。(7)~(11) の用例が他動詞全69例中65例 (94.2%) を占めている。(7)~(11) 以外に残る他動詞は (12) のような生産動詞 (工藤1995) の用例が4例見られる。生産動詞は主体動作客体変化動詞で主体の意図的動作により対象物に変化(生産)をもたらすものである。全体的にみると無助詞節は、動作主をもたない形容詞・非対格自動詞述語が多く、他動詞も動作主がないか、動作主があるとしても動作主により対象物に変化を及ぼす典型的な他動詞の性質を持つ語類は非常に少ないことがわかる。

次に非能格自動詞についてみる。非能格自動詞全37例の構成は (13) のような移動動詞の用例が24例、(14) のような動作主の持続的な動作の様態を表す用例が13例である。

- (13) a. うれしきよしを言ひて、人立ちぬるほどには、(落窪240)
 b. かの伊予の家の小君参るをりあれど、(源氏1-263)
 c. 皆歩みのぼるほどに、これはた、いと儀式ことに、(落窪232)
- (14) a. 秋は紅葉の林に天女下りましまして、遊びたまふところなり。(うつほ1-27)
 b. おとど、おどろき騒ぎたまふこと限りなし。(うつほ1-223)

(13) (14) のような非能格自動詞は意図的な動作主が存在するが、動作主の動作や変化に注目するだけである。この点は上記他動詞の傾向——動作主のある場合でも動作主の動作そのものに注目するものが多い——と共通する⁷⁾。

以上の無助詞節における述語のタイプの傾向を整理すると、次の (15) のようになる。

(15) 無助詞節における述語のタイプの傾向

- a. 無助詞節は節の種類および内の関係か外の関係かの連体修飾構造の違いに関わらず、述語と述語が受ける項は、次のような関係が多い。

《主語》 ϕ 非対格自動詞・形容詞

- b. 無助詞節で (特に外の関係)、述語に他動詞、非能格自動詞が用いられる場合、次のような関係を成すことがある。

《主語》 ϕ 他動詞

《主語》 ϕ 非能格自動詞

(15a) の構造で、非対格自動詞と形容詞の主語は動作主ではなく、自然になんらかの変化を被る対象物、或いは状態主としての対象物である。このような非対格自動詞と形

容詞がとる主語の意味的性質は、他動詞の目的語が動作主ではなく動作主の働きかけや状態変化、位置変化等の変化を被る対象物であるのと同様である。非対格自動詞、形容詞の主語が他動詞の目的語に相当する対象物と見なされるのは、このような意味的な側面の共通点という要因があるからである。(15a)の構造から無助詞節がとる述語の主語は、意味的に「対象」として働く傾向を有していることが窺える⁸⁾。このような性質は「非対格性」と呼ばれている。無助詞節の非対格性と関連して、高山(2002)では源氏物語の連体修飾句においてハダカ格(本稿の無助詞)が主語を表す場合と「の」格が主語を表す場合の用例を調査し、ハダカ格は「より内項主語表示として用いられる傾向」(239p)があることを報告している。「内項」とは本稿でいう意味的な対象物主語に相当するので、これは本稿の結果と一致する。ただ高山(2002)の調査は述語が動詞の場合を対象にしておき非対格自動詞の分布も本稿の調査より比較的低いが⁹⁾、無助詞節において形容詞と合わせて非対格自動詞の占める割合はかなり高いものであることを指摘しておく。

このような無助詞節における述語の非対格性を裏付ける現象に、連体修飾部の複合語化現象が指摘できる。無助詞節は「本意なきこと」(落窪367)、「あぢきなきこと」(源氏1-286)、「限りあること」(源氏1-121)のように、節内部の主語名詞句と述語が全体として複合語化している例が多く観察される(無助詞節全833例中277例33.2%)¹⁰⁾。例えば「本意なき」は不本意である、期待はずれであるという意味を表すが、本来は「本意ゆなき」の2語で本来の意志や目的がないといった意味であったのが全体として一つの複合語のように用いられる例である¹¹⁾。無助詞節で主語と述語が複合語化している例が多く見られるのは無助詞節の述語に見られる「非対格性」の性質に起因するものと考えられる。すなわち、「対象」は述語と一番密接な関係にあり、動詞と結びついて一体化しやすいものである。これは現代語の複合語化現象にも見られるものである。影山(1999)によると、現代語で「肩こり」「胸騒ぎ」「子育て」のような動詞から由来する複合名詞の場合、「子育て」が子が育てるではなく、子を育てるという意味になるように、動詞は「対象」を表す項とだけ結合できることが指摘されている。

3.1.2 「の」介在節

次に、「この木のあらむところ尋ねて」(うつほ1-23)、「年の重なるに添へて」(源氏1-300)のような「の」が介在する節の述語のタイプについて見る。「の」介在節の述語の分布については金(2007)に論じられているが、本節では金(2007)の述語の分け方に若干の修正を加え¹²⁾、述語の性質について再度考察することにする。「の」が介在する節は前記の表1を全体的にみた場合、連体節、準体節共に述語の分布に特別な偏りは見られない。しかし、表2のように連体節、準体節をさらに内の関係、外の関係に分けてみると、一定の傾向性が観察される。次の図2は表2における「の」介在節の結果をグラフ化したものである。

まず、「の」連体節についてみる。表2および図2をみると、「の」連体節は、内の関

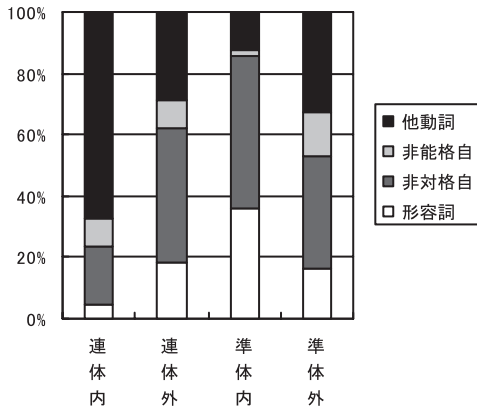


図2 「の」介在節の述語のタイプ

(85.5%) を占める著しい偏りを見せている。他動詞の用例も14例見られるが、14例中12例(85.7%)が「思ひ知る」「あひ知りてはべる」「わづらひはべりし」「得たる」「心持たる」のような主語名詞句の知覚感覚状態や所有状態を示すものである。また、非能格自動詞は「女房の下らんに」(源氏1-268)、「乳母の使ひける従者の、下屋に曹司してありけるを」(うつほ1-48)の2例が見られるのみである¹³⁾。このような「の」準体節内の関係に見られる傾向は、前節で観察した無助詞節の述語のタイプの分布と近似している。無助詞節同様に、全体的には非対格性の述語が来る傾向を示しており、他動詞の場合でも動作主性をもたないか弱い語類である。一方、「の」準体節の外の関係の場合は、特定の語群が集中する傾向は見られない。

以上の「の」介在節を述語のタイプの分布傾向から整理すると、次のA、Bの二つのグループに分けることができる。Aは形容詞、非対格自動詞が集中する連体構造で、Bは他動詞の分布が多いか、特定の語類に偏らない連体構造である。

A 「の」準体節内の関係

B 「の」連体節内の関係、「の」連体節外の関係、「の」準体節外の関係

「の」介在節は全体でみると「の」準体節内の関係以外はみなBグループに所属しており、無助詞節に比べると語類の分布は比較的自由であると言える。ただ一見自由なように見えても、Aグループの「の」準体節内の関係がそうであるように、「の」介在節全体の他動詞の分布にも一定の意味的性質の偏りがあることを確認しておきたい。「の」介在節の他動詞全279用例の構成を示すと、まず(16)のような主体の動作を表す主体動作動詞が146例で5割強を占める。主体の動作の内容は(16a、b)のように「言ふ」「のたまふ」を中心とした主体の言語活動を表すものが79例、(16c、d)のように言語活動以外の主体の動作や長期的動作を表すものが43例、(16e)のように述語が「す」で具体的な行為の内容を指定しないものが24例である。次に(17)のように主体の知覚感覚活

係にある場合は動作主が存在する他動詞と非能格自動詞の占める割合が高く、特に他動詞は「の」連体節内の関係全147例中99例を占め、67.3%の高率である。一方、外の関係は、内の関係とは反対に動作主が存在しない形容詞と非対格自動詞の占める割合が比較的高いが(232例中145例62.5%)、他動詞も3割近くを占め、特定の語類に偏る分布ではない。

次に「の」準体節を見る。「の」準体節は、内の関係の構造は形容詞と非対格自動詞の割合が合わせて全111例中95例

動を表す用例が82例、(18)のように主体の所有状態を表す用例が16例、(19)のように主体の動作と主体の変化を表す再帰動詞の用例が5例を占める。この中(17)(18)は動作というより主語の思考や知覚活動、状態を表すもので、(16)と(19)は両者共にその動作をすることによって対象物に変化を加える性質のものではなく、主体の動作や変化のみに注目する点で共通する。(16)~(19)の用例が「の」介在節他動詞用例全279例中249例(89.2%)を占めている。

- (16) a. さすがに、人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて、(源氏1-355)
 b. 一日、君ののたまひしは、(うつほ1-331)
 c. 仲忠、七人の人の調べたる大曲、残さず弾く。(うつほ1-533)
 d. この殿は、殿のしろしめすべき所なるを、(落窪277)
 e. かかるわざは人のするものにやあらむ(源氏1-374)
- (17) a. 女の思ふことは、また人まうくるところそ嘆くなれと(落窪252)
 b. 人々の見るところもあるを、同じくは少しよろしくせむ(うつほ1-333)
- (18) a. 燕の持たる子安貝を取らむ料なり(竹取82)
 b. その君たちの得たまはむに添へられよ。(落窪348)
- (19) a. 老人どもの着るべき物のたぐひ、(源氏1-370)
- (20) a. 御料とて人の奉れる御衣一具、(源氏1-375)
 b. 鳥の子うまむ間に、綱を吊り上げさせて、(竹取84)

「の」介在節で(16)~(19)以外に残る他動詞は(20)のような主体の動作により対象物に変化が加わる主体動作客体変化動詞の用例が30例(10.7%)見られる。たとえば、(20a)は主体の動作により所有関係の変化をひきおこすタイプ(8例)で、(20b)は主体の動作が対象の生産を生み出す生産動詞(7例)である。一般に、他動詞と言えどこのような主体の意志的動作により対象物に変化をもたらすべくはたらきかけてゆく意味的性質が典型的であるといえる。しかし「の」介在節は、他動詞といってもこのような対象へ変化をもたらす他動詞の用例は1割強にすぎず、主体動作動詞や属性、状態を表す用例が9割弱を占める。また「小君の渡り歩くにつけても」(源氏1-204)、「人の聞き笑はむことを日にそへて思ひたまひければ」(竹取87)のような非能格自動詞も他動詞の主体動作動詞と同様に動作主の動作そのものに注目しており、対象物に変化をもたらす性質は備わっていない。

3.2 他動性回避——意味的側面と構文的側面——

本節では、無助詞節と「の」介在節における他動詞の性質と各節内に現れるヲ格の性質に注目する。まず、前節までに考察した無助詞節と「の」介在節に用いられている他

動詞の意味的性質について再度整理する。各節に用いられている他動詞がどのような性質をもつものであるのかを考察するため、他動性（他動詞としての性質）を測る基準として、Hopper & Thompson (1980)、ヤコブセン (1989)、角田 (1991) を参考にし「参加者二人以上」「意志性」「動作性」「対象変化」の4項目を設定する¹⁴⁾。参加者二つ以上は動作者と動作の対象の二つ以上の参加者があるか否か¹⁵⁾、意志性は主体の意志・意図のある行為又は動作か否か、動作性は動作主による動作か否か、対象変化は動作主の動作による対象物への変化があるか否か、をそれぞれ問題にしている。表3は無助詞節と「の」介在節に用いられている各他動詞別の他動性を整理したものである。

表3 他動詞別の他動性

他動詞の種類	参加者二つ以上	意志性	動作性	対象変化
状態、所有動詞	+	+	-	-
知覚感覚動詞	+	+	-	-
主体動作動詞	+	+	+	-
主体動作客体変化動詞	+	+	+	+

(※+：あり、-：なし)

表3の他動詞の種類で各項目の他動詞は無助詞節と「の」介在節両方に用いられており、両者の他動詞の分布が類似していることがわかる。ただし無助詞節の他動詞は、主体動作客体変化動詞に該当する生産動詞の用例はごく少数にとどまっており(3.1.1節)、状態、所有動詞と知覚感覚動詞のように参加者が二つ以上で意志性があっても動作性がなく他動性が弱い語類が中心である。また、動作性があっても主体動作動詞のように対象変化を伴わないもので構成されている。次に、「の」介在節は無助詞節に比べると述語のタイプに偏りがなく、他動詞も比較的自由に用いられており(3.1.2節)、対象変化を伴う主体動作客体変化動詞の用例も見られる。しかし、対象変化を伴わない語類が大部分を占めており(9割弱)、この傾向は無助詞節と同様である。動作主による対象への変化があるか否かは他動性を決定するもっとも重要な要因で(角田1991参照)、他動詞を他動詞たらしめる意味的性質である。しかしながら表3でみるように対象変化の意味的性質をもつプロトタイプの他動詞は無助詞節と「の」介在節のどちらの連体修飾構造においても最も周辺的に用いられており、いずれの構造においてもこの性質をもつ他動詞が回避される傾向が観察される。このような現象を以下では、「意味的他動性回避」の傾向と呼ぶことにする。

次にヲ格名詞句が修飾部内に存在するか否か、存在しているならヲ格の性質はどのようなものなのかについて検討する。この問題は上記の意味的他動性回避の傾向と関連するが、連体修飾構造内にヲ格名詞句が存在するか否かは構文的な問題であるので、上記の他動詞自身の意味的性質とは分けて考える必要がある。

表4 各節におけるヲ格の介在

	無助詞節				「の」介在節			
	連体節		準体節		連体節		準体節	
	内	外	内	外	内	外	内	外
意味的ヲ格	0	0	0	3	2	7	6	10
明示的ヲ格	0	6	0	0	1	3	0	4
ヲ格介在無	9	38	0	13	96	57	8	85
他動詞合計	9	44	0	16	99	67	14	99

表4は述語が他動詞の場合のそれぞれの節内におけるヲ格の介在の有無を示したものである。表4で意味的ヲ格とは「幼き人のかかること言ひ伝ふるは」(源氏1-186)のように意味的にヲ格として解されるがヲ格が顕在しない名詞句を指し、明示的ヲ格とは「木の道の匠の、よろづの物を心にまかせて作り出だすも」(源氏1-145)のようにヲ格が顕在する名詞句を指す。以下特に断らずヲ格と表記する場合は、意味的ヲ格と明示的ヲ格の両者を含む。

まず表4で言えることは、①全体的に意味的ヲ格にしる明示的ヲ格にしる、節の種類に関係なく修飾部内にヲ格が介在する例が少ない。②目的語を統語的な手段で明示する明示的ヲ格より他動詞との意味的な関係にゆだねる意味的ヲ格の介在が全体的に多い。③ヲ格の介在は無助詞節より「の」介在節の方に多い。これはそもそも他動詞が無助詞節にはあまり用いられておらず、「の」介在節の方に多い傾向(3.1.1節)を反映しているものと考えられる、のような点が指摘できる。

上記①～③の特徴の中で①の修飾部内にヲ格名詞句が介在する用例が少ないという傾向と関連して、「の」連体節内の関係で興味深い現象が観察される。すなわち、「の」連体節内の関係は各節の中で述語が他動詞である割合が最も高く7割弱を占めていた(表2)。しかし「の」連体節内の関係の他動詞全99例中94例が次の(21)のようにヲ格名詞句が連体修飾部内に存在せず、主名詞として連体修飾部の外に出されている構造で、ヲ格名詞句が節内に介在するのは3例にとどまる(残り2例は場所格が主名詞になっている)。

(21) a. 仲忠、七人の人の調べたる大曲、残さず弾く。(うつほ1-533)

b. 陸奥国守の奉れる陸奥国紙あり。(うつほ1-194)

つまり「の」連体節内の関係は他動詞が最も多く用いられている構造であるから、ヲ格が修飾部内に自由に現れてもよさそうであるが、実際は修飾部の外にヲ格が取り出されることによって、修飾部内で述語が直接的にヲ格を支配する構造ではなくなっているのである。このような傾向は現代語の「の」が主語を表す連体修飾節において見られる傾向

を思い出させる。現代語の「の」が主語を表す連体修飾節では、たとえばヲ格は「ジョンの本を買った店」のように連体修飾部の主語と述語の間に介在しにくく、「ジョンの買った本」のように主名詞として連体修飾部の外側に出されると許容度が上がることが指摘されている（Watanabe 1996）。現代語のこのような傾向は「他動性制約」（transitivity restriction、Watanabe 1996）と呼ばれている。

次に修飾部内に現れているヲ格の性質についてみる。ヲ格の性質は各節における述語の分布傾向とも関わるので、前節で示した述語の分布傾向をもう一度示しておく。

A 無助詞節・「の」準体節内の関係

B 「の」連体節・「の」準体節外の関係

Aグループは形容詞、非対格自動詞が多く分布する連体構造であり、Bグループは他動詞の分布が多いか、特定の語類に偏らない連体構造である。無助詞節は前節では示してないが、述語の分布は「の」準体節内の関係と同様の傾向なので（3.1.1節）、Aグループに合わせる。まずAグループに介在するヲ格15例の性質について見ると、ヲ格は(22)のように所有状態、動作、言語活動を表す他動詞述語の対象である（意味的ヲ格9例、明示的ヲ格6例）。またBグループに介在するヲ格27例は、(23a、b、c)のように言語活動、動作を表す他動詞述語の対象を表すヲ格が24例で多く（意味的ヲ格17例、明示的ヲ格7例）、(23d)のような動作主の意志的な行為によって変化を被る対象を表すヲ格は3例にとどまる（意味的ヲ格2例、明示的ヲ格1例）。このように修飾部内に存在するヲ格名詞句が対象変化の対象を表さない用例が多い傾向は、前述の他動詞自身の意味的他動性回避の傾向と一致する。

(22) a. かく言ふは播磨守の子の、蔵人より今年冠得たるなりけり。（源氏1-278）

b. 三人の人並びて、琴を弾き遊ぶところに下ろし置きて、（うつほ1-22）

c. 俊蔭、はじめよりのことを詳しく申すときに、（うつほ1-32）

(23) a. 幼き人のかかること言ひ伝ふるは、いみじく（源氏1-186）

b. 上野の親王の、大いなるわざしたまふなるを、（うつほ1-159）

c. この落窪の君の、やさしくいみじきことをし出でたりけるが～（落窪159）

d. 木の道の匠の、よろづの物を心にまかせて作り出だすも、（源氏1-145）

以上のヲ格名詞句に関する構文的特徴を整理すると、無助詞節と「の」介在節の修飾部の構造内にヲ格名詞句が介在する用例が少なく、ヲ格名詞句が現れている場合、その性質は動作主によって対象変化を被る対象ではない傾向を示している。このような現象を以下では、「構文的他動性回避」の傾向と呼ぶことにする。

4. まとめ

本節では3節での考察をもとに「の」介在節と無助詞節の述語部に見られる違いを整理し、両連体修飾構造の選択に関わる要因は何かについて検討する。まず3節で検討した各節の述語部の特徴をまとめると、次の表5のようになる。

表5 述語部の特徴まとめ

	Aグループ	Bグループ
節の種類	無助詞節・「の」準体節内の関係	「の」介在節(「の」準体節内の関係以外)
述語の種類	形容詞・非対格自動詞	他動詞が多いか特定語類に偏らない
修飾部の特徴	主語と述語の複合語化(無助詞節のみ)	—————
述語の性質	非対格性	—————
述語の性質	他動性回避(意味的・構文的)	他動性回避(意味的・構文的)

表5のA、B両グループは前節で示した通りで、「の」準体節の内の関係を除けば、Aグループは無助詞節、Bグループは「の」介在節にほぼ相当する。したがって、A、B両グループの違いは、無助詞主語か「の」が主語を表す助詞として使われているかの違いと関連付けて考えることができる。表5を基に本稿で観察した内容を整理すると、次のようである。

- ①無助詞主語の連体修飾構造は、述語に形容詞、非対格自動詞が用いられる傾向が非常に強く、非対格性述語の性質を持つ。
- ②無助詞主語の連体修飾構造は、述語の非対格性により対象語主語との結びつきが強く、主語と述語が複合語化するケースも多い。
- ③「の」格主語の連体修飾構造は、「の」準体節内の関係以外は述語が他動詞が多いか特定語類に偏らない。
- ④無助詞主語と「の」格主語の連体修飾構造は、共に意味的他動性回避と構文的他動性回避の傾向を示している。

①～④の結果から、無助詞主語の連体修飾構造は述語が「非対格性」「他動性回避」(意味的・構文的)の性質を持つ場合に選択され、「の」格主語の連体修飾構造は「非対格性」には関わらず述語が「他動性回避」(意味的・構文的)の性質を持つ場合に選択されやすい、と整理できる。非対格性と他動性回避は互いに異なる別の性質としてではなく、連続した関係として捉えられるものである。非対格性の述語である形容詞、非対格自動詞は動作主をもち、状態主や自然になんらかの変化を被る対象物を主語として取る。他動性回避で回避される、動作主によって対象変化を受ける対象物と対象変化をもち、意味的性質はいわば非対格性の対極にある性質である。無助詞節の述語が非対格性と同時に他動性回避の傾向をもつのもこのような理由のためであろう¹⁶⁾。

最後に上記「の」介在節の整理は無助詞節と比較し全体的に見た場合であることを確認しておく。「の」介在節は詳細にみると節の種類によって述語の分布に相違が見られる。目立った特徴としては「の」準体節内の関係には形容詞・非対格自動詞が集中し、「の」連体内の関係には他動詞が多く分布することが挙げられる。金（2007）ではこの二つの構造における述語の分布の違いには連体修飾部が主名詞と成す意味関係の役割分担という要因が関わっていることを論じた。本稿では主名詞と修飾部との関係については論じてないが、この問題は無助詞節を含めて整理する必要がある。これについては稿を改めて論じたい。

5. おわりに

以上、中古語の連体修飾構造における無助詞主語と「の」格主語の用例を分析し、連体修飾構造に見られる述語の特質について考察した。結果、連体修飾構造の選択に関する要因として「非対格性」「他動性回避」（意味的・構文的）の性質を指摘した。このような連体修飾構造の現れに変化をもたらすキー要素は他動性を表示するヲ格の表示であろうと予測される。ヲ格は動詞との意味統語的關係上、重要な位置を占める構造格である。周知のように平安時代以降の歴史的展開で日本語は主語を表す主要な助詞として無助詞を選択することも「の」を選択することもなかった。無助詞主語と「の」格主語がヲ格の表示、他動性回避とどのように関わっていったのかについては歴史的展開を追わなければならない。今後の課題である。

注

- 1) 「の」格主語と無助詞主語は主節や接続節においても用いられるが、本稿で対象とするのは連体修飾構造の用例に限定する。
- 2) 源氏物語、落窪物語、竹取物語——日本古典文学全集（小学館）、うつほ物語——新編日本古典文学全集（小学館）による。源氏物語、うつほ物語はそれぞれ第一巻を対象としている。
- 3) 石垣（1955）では名詞句内部における述語用言の助動詞の種類から、「形状性名詞句」には状態性をもつ述語が、「作用性名詞句」には特に状態性を持つ語類に限らず、多様な意味的性質をもつ述語が用いられていることが指摘されている。
- 4) 金（2007）では準体節の内の関係を「同格節」、外の関係を「内容節」と呼んでいたが、本稿では他の節との統一を図るため、「内の関係」「外の関係」の名称に統一する。
- 5) 非対格自動詞と非能格自動詞の違いは生成文法のGB理論では統語構造の違いとして考えられている（Burzio 1986）。しかし、統語構造の違い——非対格自動詞の主語が統語的には他動詞の目的語の位置に相当し、非能格自動詞の主語が他動詞の主語の位置に相当すること——については他の理論と必ずしも一致せず、反例も少なくない。筆者は統語構造の違いを否定する立場ではないが、統語構造の違いをもたらすのは本質的には動詞の意味であると考える。
- 6) 「あはれなり」「をかしげなり」のようなナリ活用形容動詞類も形容詞としてカウントする（無助

詞節全22例、「の」介在節全33例)。

- 7) 移動動詞の中で例文 (11b) の「参る」のようなポテンシャルなゴールのある自動詞は本稿では意図的な動作を表す動作主があるという意味的な側面を重視し非能格自動詞と処理している。しかし、これらは非能格自動詞の中ではポテンシャルなゴールへの変化という概念を表すという点で特殊で、非対格自動詞とみる論 (Tsujiura 1999、岸本2005) もある。
- 8) 無助詞節の述語が他動詞の場合、「人言ふやう」のような主語項を受ける例以外に「頭包みたる女ども」(うつほ1-406)、「衣着たる男」(うつほ1-416) のように他動詞の目的語項を受ける例が133例見られる。表1、表2の他動詞の合計と合わせて考えると、無助詞節で述語が他動詞の全202用例中133例(65.8%)が目的語、すなわち意味的な対象を項として取っている。
- 9) 高山(2002)では「日暮れかかるほど」「曇降る夜」のような自然物主語と結びつく述語は構造的な問題から非対格自動詞と非能格自動詞の中間的な位置にあるものと捉えている。本稿では自然現象を表す語類は意図的な動作主が存在しないという意味的な側面を重視し非対格自動詞として扱っている。ただし、このような用例は25例で全体の割合に影響するほどではないので、本稿の非対格自動詞の分布率の高さには対象とした資料の違い等が関わっているのかも知れない。
- 10) 無助詞節で主語と述語が一語化している用例は「名高き御帯」(源氏1-396)、「限りあること」(源氏1-121)のように述語が形容詞、非対格自動詞で特に「本意なきこと」(落窪365)のように述語がナキの例が多い(全277例中121例)。
- 11) 辞書の見出しでは「本意無し」の一語として扱われているものが多い。
- 12) 金(2007)では意図的な動作主がある移動動詞と感情感覚を表す他動詞は別分類していたが、本稿では前者を非能格自動詞、後者を他動詞にまとめている。
- 13) 後者は「下女で、下屋に部屋住みしていた老女」というような意味であるが、補助動詞「あり」が接続し、事態の存在を表しているとも解釈でき、非対格自動詞に近い意味になる。
- 14) 例えばヤコブセン(1989)では日本語動詞の他動性に関する意味要素として、①動作主と対象物の二つが関与すること、②動作主の意図性、③対象物の変化、④現実の時間軸における変化であることの4点を挙げている(217p)。この中②と関連しては角田(1991)のように否定的な論もある。④はアスペクトの問題で動詞に接続する助動詞の形式等も関わってくるので、本稿では取り上げないことにする。
- 15) たとえば「太郎が死んだ」の参加者は一つ、「飛行機が宇宙を飛んだ」の参加者は二つであるように、意味的な動作者と動作者の動作が及ぶ対象が参加者である(角田1991:75-76参照)。
- 16) 表5をみると一見、述語が形容詞・非対格自動詞の場合は無助詞節、他動詞の場合は「の」介在節の連体修飾構造が選択される傾向にあるように見える。しかし、この理解は正確ではない。厳密にみると、まず準体節の場合は述語の種類に関係なく無助詞主語より「の」格主語が用いられる傾向にある(表1、表2参照)。次に連体節の場合は形容詞・非対格自動詞は無助詞主語、他動詞は「の」格主語が用いられる連体節が用いられる傾向にある。ただし「の」連体節自体でみると非対格自動詞も他動詞に継いで高い比率を示しており「の」連体節自体が他動詞が集中する構造ではないことには注意する必要がある。

参考文献

- 石垣謙二(1942)「作用性用言反撥の法則」『国語と国文学』(『助詞の歴史的研究』1955、215-238、岩波書店所収)
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 影山太郎(1999)『形態論と意味』くろしお出版
- 岸本秀樹(2005)『統語構造と文法関係』くろしお出版

- 金銀珠 (2007) 「連体修飾構造における主格助詞「の」の変化——中古語と現代語との比較——」『HERSETEC テキスト布置の解釈学的研究と教育』1-2、57-72、名古屋大学大学院文学研究科
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 高山道代 (2002) 「源氏物語における主格表現としてのハダカ格とノ格について」『人間文化論叢』5、231-241、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- 高山道代 (2005) 「古代日本語のヲ格があらわす対格表示の機能について——ハダカ格との対照から——」『国文学解釈と鑑賞』70-7、181-191、至文堂
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 角田太作 (2005) 「他動性の研究の歴史と今後の期待」『言語』34-8、51-57、大修館書店
- 寺村秀夫 (1975-1978) 「連体修飾のシンタクスと意味——その1～その4——」『日本語・日本文化』4号～7号 大阪外国語大学留学生別科 (『寺村秀夫論文集 I ——日本語文法編——』1992、157-320、くろしお出版所収)
- ヤコブセン・ウェスリー・M (1989) 「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』213-248、くろしお出版
- Burzio, Luigi. 1986. *Italian Syntax*. Reidel.
- Dowty, D. R. 1991. "Thematic Proto-Roles and Argument Selection." *Language*, 67, 547-619.
- Hopper, P. J., and S. A. Thompson. 1980. "Transitivity in grammar and discourse." *Language*, 56-2, 251-299.
- Tsujimura, Natsuko. 1999. *The handbook of Japanese Linguistics*, Malden, Mass.; Oxford, UK: Blackwell Publishers, 349-377.
- Van Valin, R. D., Jr. 1990. "Semantic Parameters of Split Intransitivity." *Language*, 66, 221-260.
- Watanabe, Akira. 1996. "Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: a Cross-Linguistic Perspective." *Journal of East Asian Linguistics*, 5, 247-286.